テーマ　天振 反復

サブテーマ　"気"，"すえつけとしてのインスタレーション"，"複製化とその影響"を軸に場について考える。

NOU王　昨年のシンポジウムでは大谷という場所の物理的な特性スケールとか光が中心に語られた気がする。それらは作品の外側の問題であった。場と作品関係によって以外語れない作品（それは作家がもつ表現のフィールド）と場とのからみ合いがおもしろいのだし今年は、場のもつ精神性を主軸にしてみたい。

TANO　ここで語られている"気"というのはベンヤミンのいうところの"アウラ"に近いようだ。気を失った知覚を満足させるためにファシズムがかり戦争へ結びつくというのが複製化による弊害としてベンヤミンが考えた説である。当時（'33年）と現代とは状況がちがっている。気を感じとる力すら現代人にはない。画廊の空間は実験室のような異状なものなのにものがいわうる0の空間ととらえてしまっているのは我々の感覚がグロテスクになってしまったあらわれではないか。一回失ったものをとりもどすことは可能なのか。今のグロテスクな感覚をもってして、大谷で展覧会をやることの意味はほんとにあるのか。ペシミスティックになりはしないか，毎年来て思うことは以上のようなことである。

MAEYAMA　近代になって絵画彫刻は鑑賞用として場ときりはなされてしまったが以前は宗教建築に代表されるようにその場のもつ雰囲気，力なりを利用し場との関連の中に作品が成立してた。大谷での展覧会はそんなことをおもいおこさせる。

ICHIHARA　はじめて大谷にきたときのように場の物理的な力に圧倒されはしなかった。把握できる空間の中に作品がおかれてるという感じである。空間にくるみこまれるというよりは各々の作家が空間をつまく作品の中にとりこんでいる印象がある。場のもつ神秘性が作品に悪い影響を与えているという事はないようで，かえって細部のアラがみえずに作品がよくみえる光，雰気，作品をとりかこんでいる自然条件を素材と考えてもいいと思う。大谷はさして美術館や画廊とかわらない。芸術作品が生活からきりはなされたところにある点，大衆と美術が分離している点において、大谷も画廊の単なる延長にあるといえる。作品のもつ使命を考慮するならば

日常空間におかれるのが望ましいという。

MIZUTOME　作品の物質性をこだわって制作していると、それを展示する場自体に疑問がわいて。画廊の壁が単なるうすいしきりのように思えて、うすっぺらさが気になってしまう。大谷には本物の空間があると感じる。素材の側面からみれば、なじんでいる作品とそうでない作品があった。素材に対するこだわりについて作家の人にきいた。

OOTOMO　場を意識して大谷でできることをやろうと思った。画廊空間に限界を感じるし、自分のつくりたいものにあわない。自然な空気にふれる場が自分の作品にとっていいと思う。制約は入ってくる。

YUZAWA　作品の自立性を作家がいくら唱えても、作品の内に展示という場が生きるような作品をつくりたい。空間が素材として作品の中に入ってくれればいい。大谷には視点の限定がない。今まで自分がもってた絵画的認識方法ではとらえきれない部分があり物質性にしてもスケールにしても今後の課題となると思う。

MIZUTOME　空間の詩的な意味。空間のよみとり方として大谷の詩的な面を素材としてひきだすこともできうる。場の音楽性。

TAKEUCH　空間をふくめて形は意識の内にな　形空間は自分にはちょっと遠い存在だ。もっと自分には大事なものがある。自然の中にとけこむといったかんじを意識すること。

KUSAKA　制作する時いつも場を意識しているがどこでも成立する作品であることも重要だとじこめる作業をつづけている。

BANNO　空間に対するぶつかりかたを考える。自分のもっているものを全てぶつけてみようとした。自分はすりへっているのに大谷の空間は、そのままである。何か別の方向でやれないかと思い。プライベートな空間をつくるという方向もあるのかと感心した作品があった。

ISHIMOTO　暗い空間の恐怖感を大事にしたい。手さぐりで感じるものがいい。見づらいところに展示したのは好奇心をもった人にだけみえればいいと思ったからだ。

観者A　大谷にわざわざ来たのは場との霊的な交感を感じたかったから。場所の特殊性の上に作家自身の＋αが感じられる作品がいい。

KINURA　場に勝たねばならない という方向で制作した

TUCHIYA　田野辺のいわれたことは 複雑な思いでうけとめている 今年の作品は自分と他を含めて あっさりまとまった作品が多かった。場によりそった作品でうまくいきすぎており 後に自分の中に何ものこらなかった。去年は空間に体当たりしてこれでもかと思うくらい巨大な作品をつくった が空間の存在感が大きすぎることを知らされただけであった。
消極的な方が浮かび上がるものが大きいのではないかと感じている

ITÔ (NANAO)　大谷を最初におもしろいといったのは自分だった それゆえ場に対する思いは一言でいえないものがある。見にくる人の質が気になった 人はおかれる状態によって観点がちがってくる。画廊 美術館は作品をみるために来た人向けの場であり 大谷は、全く何の前知識 予備知識もなく作品をみせられてしまうのだ 一人なら作品と素直に出会えるのに団体だとダメだ 日本の美術がいい方向にいかない原因がこんなところにもみいだされるようだ。

UEYAMA　つくる側とみる側では作品に出会うまでのシチュエーションがちがう。つくる側の横穴をとおる水平方向とはちがい、みる側は垂直方向に地下にもぐってくるので恐いという感がある。

MAEYAMA　場にそう方向 自分のフィールドをうち出す方向の 大まかにわけて2つの方向があるように見える 場にそう方向の作品の方がインパクトがあった。場の雰囲気に流れる危険性 よのこるけれども

TANO　はたして美術でいいのか、大谷で展覧会をやることの意味が見出されない。

ICHIHARA　アウラ(一回性、力点)が失われていくのは時代の宿命である。ベンヤミンはアウラを失うことでファシズムがひきおこされると説いたが逆にアウラを追求することによって大衆から作品がはなれていき 総動員体制の優越をひきおこすのではないか 作品が今という生きている時代とどう関わっていけるかということを考えねばならないと思う

MASAK　1回々の作品自体の内の問題に最終的にはひきもどされるのではないか 対立していくというより 作家のトレーニングの場であり スケール感を越えて自分の仕事をはたしているかを評価したい。

ITÔ (NAOAKI)　場によりそうのでもなければ スケールでもない。普段 自分のもっている

課題なり仕事をそのまま もってくることによって何が生ずるか興味をもってとりくんだ。この先 むずかしいなという感はどうしてもいだかざるを得ない。

~~SAKAI~~　美術のための場に慣れてしまっている現在 大谷には場に対する新鮮な思いが可能だったことも事実ではあるが。

SAKAI　年々別なものになりつつあるようだ
この場所でみいだしたものを展開していってほしいという思いがある。

以上　1987. 11. 8 OHYA にて

後日の雑談　/ 止まらない部分での作品がいい。完結したものは墓のよう 人をよせつけない。
人間に直結していた時代。生きていくことに直結している そのことを知らせるきっかけを大谷がなれば…。
なぜ大谷でやりたいのか 現在の美術館の体勢のどこがいけないのか

美術の終焉をなげくのはやさしい。
はたしてどうなのか 現在 大衆の人類の課題はなのか
労働を否定し 芸術をもまた無視されている
現代において 何をもっての芸術なのか 芸術とは何か
芸術は可能か